

■■■ 長篠の船 ■■■ == => 郷土随筆

つい最近のこと、丸の内の国際文化協会で二、三の人と一緒に、目下来朝中のアメリカのある大学の教授に会った時、日本の農村の特質について話してくれといわれてちょっと戸惑いした。実は日本の農村や農家の生活については、しょっちゅう話していることなのだが、さて、あらたまって歴史も伝統も全く異なった世界の人に、簡潔にわかりやすく話すとなるとむづかしい。それには少なくとも東洋の見地からの特質を示さぬかぎり意味はないのだし、かつ納得さすわけにゆかぬ。ただ事実を知っているからといって、それだけでは知っていることにはならぬのだ。

それと同じで、同じ日本人同志で、あなたの郷里はどういう処だというような質問をうけて、戸惑いしたのは一再でない。ありふれたお国自慢といったところで村単位では大したこともない。三河の東隅の僻村ですよなどといってもちっとも内容の説明にはならない。それにこの頃は国鉄の駅が村内に五つも六つも在ろうというのだから通らない。やはり昔風だが古戦場などという他はない。

ところが今一つ、私の今までの経験では、船が着いたということ、豊川の舟運の終点であったこと、これは地理的な説明だが、社会経済的に、また交通文化的に特色を示すものであったように思う。あの古戦場すなわち古城址近くの今飯田線の鉄

橋下のところを渡合^{どあい}といって、そこに豊橋通いの船が着いた。もちろん旅客輸送が目的ではなく、専ら貨物の木材や薪炭を積出し、一方輸入品として極めて少量だが塩はじめ信州地方にはいる綿、砂糖、畳表といったものがあつた。

船はさらに寒狭川を遡って古いことではないが私の生まれた横山まではいった。

私の家はその問屋のようなことをして、今発電所のある下の処が舟着きで河岸ともっばら^{かし}いった。私が物心覚えた頃は充分衰微していたが、少しく前までは信州

方面から米や樽を馬で運んできて、ここから船に積んだ。もちろんわずかなものであつたがともかく船が上つたのだ。

船にはミヨホリ（水路掘り）という二本爪の雁爪に似て非常に柄の長い道具を積んでいて、ところどころ船頭さんが船を止めて水路を掘ったものであつた。だから私など豊橋に往くには徒歩でなくばこの船で往つた。朝早く出ると夏分なら午後の三時頃には船町の河岸に着いた。ただし豊川の下流にかかって満潮に会うと船脚は一向に進まない。船から一時上陸して樹陰で午睡などしたことを覚えている。

こんな状態だから、それより下流の渡合からはもっと頻繁に船が出た。対岸の小川からも出た。小学校の一年の時であったと思うが、他に転任される先生をこの渡合まで生徒一同で見送った。雨のそば降る朝で、川面は微かに煙っていた。私たち生徒は傘をさしていた。崖の上から校長先生や村長さんは暇乞いされる先生を見ていた。先生のために岸にトモを掛けた船が待っていた。その船が静かに川霧の中を降って去ったのが強く印象に残っている。

今思うと、何かこう中国の蘇州あたりの水郷を諷った詩の文句にでもありそうな状景だった。

この渡合から板敷川を少し遡ったところの小川（舟付村）は、昔は鵜川の文字を宛てていた。鵜川という地名は全国に数多いが、鵜で鮎を捕るところから出た地名であるから、早くから鵜飼船が浮かんでいたはずである。その時代を私はまだ確かめていないが、かなり古く二百年くらいも前かと思う。長篠の対岸にそびえる舟着山なども、太古、船を繋いだ岩が頂上にあり一帯が湖水であった当時の名残りだなどというが、船の着く村すなわち舟着村に在るという意味で呼び出したのが最初かとも考えられる。



■ 発電所下（宮淵下）の舟着河岸
是より上流は、矢筈滝⇒鮎滝となり舟ばかりか鮎すら上れない。